

# お律と子等と

芥川龍之介

青空文庫



雨降りの午後、今年中学を卒業した洋よういち一は、二階の机に背を  
円まるくしながら、北原白秋風の歌を作っていた。すると「おい」  
と云う父の声が、突然彼の耳を驚かした。彼は倉皇そうこうと振り返る  
暇にも、ちようどそこにあつた辞書の下に、歌稿を隠す事を忘れ  
なかつた。が、幸い父の賢造けんぞうは、夏外套なつがいとうをひっかけたまま、  
うす暗い梯子はしごの上り口へ胸まで覗のぞかせているだけだった。  
「どうもお律りつの容態ようたいが思わしくないから、慎太郎しんたろうの所へ電報  
を打つてくれ。」

「そんなに悪いの？」

洋一は思わず大きな声を出した。

「まあ、ふだんが達者だから、急にどうと云う事もあるまいがね、  
——慎太郎へだけ知らせた方が——」

洋一は父の言葉を奪った。

「戸沢とさわさんは何だつて云うんです？」

「やつぱり十二指腸の潰かい瘍ようだそうだ。——心配はなかりうつて  
云うんだが。」

賢造は妙に洋一と、視線の合う事を避けたいらしかった。

「しかしあしたは谷村たにむら博士はかせに来て貰うように頼んで置いた。戸

沢さんもそう云うから、——じゃ慎太郎の所を頼んだよ。宿所は

お前が知っているね。」

「ええ、知っています。——お父さんはどこかへ行くの？」

「ちよいと銀行へ行つて来る。——ああ、下に浅川あさかわの叔母さんおばが来ているぜ。」

賢造の姿が隠れると、洋一には外の雨の音が、急に高くなつたような心もちがした。愚ぐ図ず愚ぐ図ずしている場合じゃない——そんな事もはつきり感じられた。彼はすぐに立ち上ると、真しん 鍬ちゆうの手すりに手を触れながら、どしどし梯子はしごを下りて行つた。

まつすぐに梯子を下りた所が、ぎつしり右左の棚の上に、メリヤス類のボオル箱を並べた、手広い店になっている。——その店先の雨あま明ありかの中に、パナマ帽をかぶつた賢造は、こちらへ後うしろを

向けたまま、もう入口に直した足駄<sup>あしだ</sup>へ、片足下している所だった。  
「旦那<sup>だんな</sup>。工場<sup>こうば</sup>から電話です。今日<sup>きょう</sup>あちらへ御見えになりますか、  
伺<sup>かえり</sup>つてくれると申すんですが……」

洋一が店へ来ると同時に、電話に向つていた店員が、こう賢造  
の方へ声をかけた。店員はほかにも四五人、金庫の前や神棚の下  
に、主人を送り出すと云うよりは、むしろ主人の出て行くのを待  
ちでもするよな顔をしていた。

「きようは行けない。あした行きますってそう云つてくれ。」

電話の切れるのが合図<sup>あいず</sup>だったように、賢造は大きな洋傘<sup>こうもり</sup>を開  
くと、さっさと往来へ歩き出した。その姿がちよいとの間、浅く  
泥<sup>は</sup>を刷いたアスファルトの上に、かすかな影を落して行くのが見

えた。

「神山かみやまさんはいないのかい？」

洋一は帳場机に坐りながら、店員の一人の顔を見上げた。

「さつき、何だか奥の使いに行きました。——良りょうさん。どこだか知らないかい？」

「神山さんか？ I don't know ですな。」

そう答えた店員は、上り櫃がまちにしやがんだまま、あとは口笛を鳴らし始めた。

その間に洋一は、そこにあつた頼信紙へ、せつせと万年筆を動かしていた。ある地方の高等学校へ、去年の秋入学した兄、——彼よりも色の黒い、彼よりも肥ふとった兄の顔が、彼には今も頭のど

ここに、ありあり浮んで見えるような気がした。「ハハワルシ、スグカエレ」——彼は始はじめこう書いたが、すぐにまた紙を裂さいて、「ハハビヨウキ、スグカエレ」と書き直した。それでも「ワルシ」と書いた事が、何か不吉な前ぜんちよう兆ちようのように、頭にこびりついて離れなかつた。

「おい、ちよいとこれを打つて来てくれないか？」

やつと書き上げた電報を店員の一人に渡した後のち、洋一は書き損じた紙を噛み噛み、店の後うしろにある台所へ抜けて、晴れた日も薄暗い茶の間まへ行つた。茶の間には長火鉢の上の柱に、ある毛糸屋の広告を兼ねた、大きな日曆ひごよみが懸かつている。——そこに髪を切つた浅川の叔母が、しきりと耳搔みみかきを使いながら、忘れられたよう

に坐っていた。それが洋一の足音を聞くと、やはり耳搔きを当て  
がったまま、始終爛ただれている眼を擡もたげた。

「今日は。お父さんはもうお出かけかえ？」

「ええ、今し方。——お母さんにも困りましたね。」

「困ったねえ、私は何も名のつくような病氣じやないと思つてい  
たんだよ。」

洋一は長火鉢の向うに、いやいや落着かない膝ひざを据えた。襖ふすま一  
つ隔てた向うには、大病の母が横になっている。——そう云う意  
識がいつもよりも、一層この昔風な老人の相手を苛いらだたしいもの  
にさせるのだった。叔母はしばらく黙っていたが、やがて額で彼  
を見ながら、

「お絹きぬちゃんが今来るとき。」と云った。

「姉さんはまだ病氣じゃないの？」

「もう今日は好いんだとき。何、またいつもの鼻かぜつ風邪かぜだったんだよ。」

浅川の叔母の言葉には、軽い侮蔑ぶべつを帯びた中に、反かえつて親しそうな調子があつた。三人きようだいがある内でも、お律りつの腹を痛めないお絹が、一番叔母には氣に入りらしい。それには賢造の先妻が、叔母の身内みうちだと云う理由もある。——洋一は誰かに聞かされた、そんな話を思い出しながら、しばらくの間あいだは不承不承ふしょうぶしょうに、一昨年いっさくねんある呉服屋へ縁づいた、病氣勝ちな姉の噂うわさをしていた。

「慎ちゃんしんの所はどうおしだえ？ お父さんは知らせた方が好いいとか云つてお出でだったけれど。」

その噂が一段落着いた時、叔母は耳搔かきの手をやめると、思い出したようにこう云つた。

「今、電報を打たせました。今日きょう中にやまさか届とくでしょう。」

「そうだねえ。何も京大阪と云うんじやあるまいし、——」

地理に通とじない叔母の返事は、心細こいぐらい曖あい昧まいだった。それが何故なぜか唐突と、洋一の内に潜ひそんでいたある不安を呼び醒さました。兄は帰つて来るだろうか？——そう思うと彼は電報に、もつと大おお仰おぎな文句ぶんくを書いても、好こかつたような気がし出した。母は兄に会あいたがっている。が、兄は帰つて来ない。その内に母は

死んでしまう。すると姉や浅川の叔母が、親不孝だと云つて兄を責める。——こんな光景も一瞬間、はつきり眼の前に見えるような気がした。

「今日届けば、あしたは帰りますよ。」

洋一はいつか叔母よりも、彼自身に気休めを云い聞かせていた。そこへちようど店の神山かみやまが、汗ばんだ額ひたいを光らせながら、足音を偷ぬすむようにはいつて来た。なるほどどこかへ行つた事は、袖そでに雨あまじみの残あまっている縞しまろの羽織にも明らかだった。

「行つて参りました。どうも案外待たされましてな。」

神山は浅川の叔母に一礼してから、懐ふところに入れて来た封書を出した。

「御病人の方は、少しも御心配には及ばないとか申して居りました。追っているいろいろ詳しい事は、その中に書いてありますそうで

——」

叔母はその封書を開く前に、まず度の強どそうな眼鏡めがねをかけた。封筒の中には手紙のほかにも、半紙に一の字を引いたのが、四つ折のままはいつていた。

「どこ？ 神山さん、この太極堂たいきよくどうと云うのは。」

洋よういち一はそれでも珍しそうに、叔母の読んでいる手紙を覗きこんだ。

「二町目の角に洋食屋がありましたよ。あの露路ろじをはいった左側です。」

「じゃ君の清元きよもとの御師匠さんの近所じやないか？」

「ええ、まあそんな見当です。」

神山はにやにや笑いながら、時計の紐ひもをぶら下げた瑪瑙めのうの印いんぎ形ようをいじっていた。

「あんな所に占うらない者しやなんぞがあつたかしら。——御病人みなみまは南みなみ枕まくらにせらるべく候か。」

「お母さんはどっち枕まくらだえ？」

叔母は半ばたしなめるように、老眼鏡の眼を洋一へ挙げた。

「東ひがしまくら枕まくらでしょう。この方角が南だから。」

多少心もちの明あかるくなった洋一は、顔は叔母の方へ近づけたまま、手たもとは袂たもとの底にある巻煙草の箱を探っていた。

「そら、そこに東枕にてもよろしいと書いてありますよ。——神山さん。一本上げようか？ 抛ほうるよ。失敬。」

「こりやどうも。E・C・Cですな。じゃ一本頂きます——。もうほかに御用はございませんか？ もしまたございましたら、御遠慮なく——」

神山は金きんぐち口を耳はみに挟みながら、急に夏羽織の腰もとを擡たげて、  
 々うそう店の方へ退うそこうとした。その途端に障子が明くと、頸くびに湿布しつぷ  
 を巻いた姉のお絹きぬが、まだセルのコオトも脱くだがず、果物くだものの籠かごを  
 下くだげてはいつて来た。

「おや、お出でなさい。」

「降りますのによくまた、——」

そう云う言葉が、ほとんど同時に、叔母と神山との口から出た。お絹は二人に会えしやく釈やくをしながら、手早くコオトを脱ぎ捨てる、がっかりしたように横よこずわ坐ざりになった。その間あいだに神山は、彼女の手から受け取った果物の籠をそこへ残して、気忙きせわしそうに茶の間を出て行つた。果物の籠には青林檎あおりんごやバナナが綺麗きれいにつやつやと並んでいた。

「どう？ お母さんは。——御免なさいよ。電車がそりやこむもんだから。」

お絹はやはり横坐りのまま、器用に泥だらけの白足袋しろたびを脱いだ。洋一はその足袋を見ると、丸まるまげ髻まげに結ゆつた姉の身のまわりに、まだ往來の雨のしぶきが、感ぜられるような心もちがした。

「やっぱりお肚なかが痛むんでねえ。——熱もまだ九度くどからあるんだとさ。」

叔母は易者えきしやの手紙をひろげたなり、神山と入れ違いに来た女中の美津みつと、茶を入れる仕度いそがに忙しかった。

「あら、だつて電話じや、昨日きのうより大変好きそうだったじやありませんか？ もつとも私は出なかつたんですけれど、——誰？

今日電話をかけたのは。——洋ちゃん？」

「いいえ、僕じやない。神山さんじやないか？」

「さようでございます。」

これは美津みつが茶すずを勧めながら、そつとつけ加えた言葉だった。

「神山さん？」

お絹ははすはに顔をしかめて、長火鉢の側へすり寄つた。

「何だねえ。そんな顔をして。——お前さんの所はみんな御達者かえ？」

「ええ、おかげ様で、——叔母さんの所でも皆さん御丈夫ですか？」

そんな対話を聞きながら、巻煙草を啣くわえた洋一は、ぼんやり柱はを眺めていた。中学を卒業して以来、彼には何なん日と云う

記憶はあつても、何曜日かは終始忘れている。——それがふと彼の心に、寂しい気もちを与えたのだつた。その上もう一月すると、ほとんど受ける気のしない入学試験がやって来る。入学試験に及第しなかつたら、………

「美津がこの頃は、大へん女ぶりを上げたわね。」

姉の言葉が洋一には、急にはつきり聞えたような気がした。が、彼は何も云わずに、金口きんぐちをふかしているばかりだった。もつとも美津はその時にはとうにもう台所へ下つていた。

「それにあの人は何と云つても、男好きのする顔だから、——」  
叔母はやつと膝の上の手紙や老眼鏡を片づけながら、蔑さげすむらしい笑いかたをした。するとお絹も妙な眼をしたが、これはすぐに気を変えて、

「何？ 叔母さん、それは。」と云つた。

「今神山さんに墨色すみいろを見て来て貰つたんだよ。——洋ちゃん、ちよいとお母さんを見て来ておくれ。さつきよく休んでお出でだ

つたけれど、——」

ひどく厭な気がしていた彼は金口を灰に突き刺すが早いか、叔母や姉の視線を逃れるように、早速長火鉢の前から立ち上った。

そうして襖ふすま一つ向うの座敷へ、わざと気軽そうにはいつて行つた。

そこは突き当りの硝子障子ガラスしようじの外そとに、狭い中庭を透すかせていた。

中庭には太い冬青もちの樹が一本、手水鉢ちようずばちに臨んでいるだけだった。

麻かいまきの搔卷かきまきをかけたお律りつは氷ひようのう囊ふしを頭に載せたまま、あちら向

きにじつと横になっていた。そのまた枕もとには看護婦が一人、

膝の上にひろげた病床日誌へ近眼の顔をすりつけるように、せつ

せと万年筆を動かしていた。

看護婦は洋一の姿を見ると、ちよいと媚こびのある目礼をした。洋

一はその看護婦にも、はつきり異性を感じながら、妙に無愛想ぶあいそうな会えしやく釈やくを返した。それから蒲団ふとんの裾すそをまわつて、母の顔がよく見える方へ坐つた。

お律は眼をつぶっていた。生来薄手うすてに出来た顔が一層今日は窈やつれたようだった。が、洋一の差し覗のぞいた顔へそつと熱のある眼をあけると、ふだんの通りかすかに頬笑ほほえんで見せた。洋一は何だか叔母や姉と、いつまでも茶の間に話ましていた事がすまないような心もちになつた。お律はしばらく黙もくつていてから、

「あのね」とさも大儀たいぎそうに云つた。

洋一はただ頷うなずいて見せた。その間も母の熱臭あつないのがやはり彼には不快ふかいだった。しかしお律はそう云つたぎり、何とも後あとを続けな

かった。洋一はそろそろ不安になった。遺言、——と云う考えも頭へ来た。

「浅川の叔母さんはまだいるでしょう？」  
やっと母は口を開いた。

「叔母さんもいるし、——今し方姉さんも来た。」

「叔母さんにね、——」

「叔母さんに用があるの？」

「いいえ、叔母さんに梅川うめがわの鰻うなぎをとって上げるの。」

今度は洋一が微笑した。

「美津にそう云ってね。好いかい？——それでおしまい。」

お律はこう云い終ると、頭の位置を変えようとした。その拍子

に氷ひょうのう囊ふくろが沁ひり落ちた。洋一は看護婦の手を借りずに、元通りそれを置き直した。するとなぜかまぶた瞼まぶたの裏うらが突然熱くなるような気がした。「泣いちやいけない。」——彼は咄嗟とっさにそう思った。が、もうその時は小鼻の上に涙のたまるのを感じていた。

「莫迦ばかだね。」

母はかすかにつぶや呟つぶやいたまま、疲れたようにまた眼をつぶった。

顔を赤くした洋一は、看護婦の見る眼を恥じながら、すごすご茶の間まへ帰って来た。帰って来ると浅川のおば叔母おばが、肩越しに彼の顔を見上げて、

「どうだえ？ お母さんは。」と声をかけた。

「目がさめています。」

「目はさめているけれどさ。」

叔母はお絹と長火鉢越しに、顔を見合せたらしかった。姉は上う眼わめを使いながら、笄かんざしで鬢まげの根を搔かいていたが、やがてその手を火鉢へやると、

「神山さんが帰って来た事は云わなかったの？」と云った。

「云わない。姉さんが行って云うと好いや。」

洋一は襖ふすま側ぎわに立ったなり、緩ゆるんだ帯をしめ直していた。ど

んな事があってもお母さんを死なせてはならない。どんな事があっても——そう一心に思いつめながら、………

翌あくるひ日の朝よういち洋一は父と茶の間の食卓に向つた。食卓の上には、昨夜ゆうべ泊つた叔母おばの茶碗も伏せてあつた。が、叔母は看護婦が、長い身じまいをすませる間あいだ、母の側へその代りに行つているとか云う事だつた。

親子は箸はしを動かしながら、時々短い口を利きいた。この一週間ばかりと云うものは、毎日こう云う二人きりの、寂しい食事が続いている。しかし今日きょうはいつもよりは、一層二人とも口が重かつた。給仕の美津みつも無言のまま、盆をさし出すばかりだつた。

「今日は慎太郎しんたろうが帰つて来るかな。」

賢造けんぞうは返事を予期するように、ちらりと洋一の顔を眺めた。

が、洋一は黙っていた。兄が今日帰るか帰らないか、——と云うより一体帰るかどうか、彼には今も兄の意志が、どうも不確かでないのだった。

「それとも明日あすの朝になるか？」

今度は洋一も父の言葉に、答えない訳には行かなかつた。

「しかし今は学校がちょうど、試験じゃないかと思うんですがね。」

「そうか。」

賢造は何か考えるように、ちよいと言葉を途切とぎらせたが、やがて美津に茶をつがせながら、

「お前も勉強しなくっちゃいけないぜ。慎太郎はもうこの秋は、

大学生になるんだから。」と云った。

洋一は飯を代えながら、何とも返事をしなかった。やりたい文  
学もやらせずに、勉強ばかり強いるこの頃の父が、急に面憎く  
なったのだった。その上兄が大学生になると云う事は、弟が勉強  
すると云う事と、何も関係などはありはしない。——そうまた父  
の論理の矛盾を嘲笑う気もちもいではなかった。

「お絹は今日きぬは来ないのかい？」

賢造はすぐに気を変えて云った。

「来るそうです。が、とにかく戸沢さんとざわが来たら、電話をかけて  
くれて云っていました。」

「お絹の所でも大変だろう。今度はあすこも買った方だから。」

「やっぱりちつとはすつたかしら。」

洋一ももう茶を飲んでいた。この四月以来市場には、前代

未聞みもんだと云う恐きようこう慌わうが来ている。現に賢造の店などでも、か

なり手広くやっていた、ある大阪の同業者が突然破産したために、

最近も代だいばら払いの厄に遇った。そのほかまだ何だ彼かだといろいろ

な打撃を通算したら、少くとも三万円内外は損失を蒙こうむっているの

に相違ない。——そんな事も洋一は、小耳に挟んでいたのだった。

「ちつとやそつとでいてくれりや好いいが、——何しろこう云う景

気じゃ、いつ何なんどき時うちなんぞも、どんな事になるか知れないん

だから、——」

賢造は半ば冗談のように、心細い事を云いながら、大儀そうに

食卓の前を離れた。それから隔ての襖を明けると、隣の病室へは  
いって行った。

「ソツプも牛乳もおさまった？ そりや今日は大出来だね。まあ  
精々食べるようにならなくっちゃいけない。」

「これで薬さえ通ると好いんですが、薬はすぐに吐いてしまいうん  
でね。」

こう云う会話も耳へはいった。今朝は食事前に彼が行って見ると、母は昨日一昨日よりも、ずっと熱が低くなっていた。口を利くのもはきはきしていれば、寝返りをするのも楽そうだった。

「お肚はまだ痛むけれど、気分は大へん好くなつたよ。」——母  
自身もそう云っていた。その上あんなに食気までついたよう

は、今まで心配していたよりも、存外恢復かいふくは容易かも知れない。——洋一は隣を覗きながら、そう云う嬉かえしさにそやされていた。が、余り虫の好いい希望を抱き過ぎると、反かえつてそのために母の病気が悪くなつて来はしないかと云う、迷信おそじみた惧おそれも多少はあつた。

「若わか旦だん那な様さま、御電話でございます。」

洋一はやはり手をついたまま、声のする方を振り返つた。美津みつは袂たもとをとくわわながら、食卓に布巾ふきんをかけていた。電話を知らせたのはもう一人の、松まつと云う年上の女中だった。松は濡れ手を下げたなり、銅壺どうこの見える台所の口に、襷たすきかけの姿を現していた。

「どこだい？」

「どちらでございますか、——」

「しようがないな、いつでもどちらでございますかだ。」

洋一は不服そうに呟きながら、すぐに茶の間まを出て行った。おとなしい美津に負け嫌いの松の悪あつこう口を聞かせるのが、彼には何となく愉快なような心もちも働いていたのだった。

店の電話に向って見ると、さきは一しよに中学を出た、田村たむらと云う薬屋の息子だった。

「今日ね。一しよに明治座めいじざを覗かないか？ 井上だよ。井上なら行くだろう？」

「僕は駄目だよ。お袋が病気なんだから——」

「そうか。そりや失敬した。だが残念だね。昨日堀ほりや何かは行っ

て見たんだって。——」

そんな事を話し合った後、のち電話を切った洋一は、そこからすぐに梯子をはしご上つて、例の通り二階の勉強部屋へ行つた。が、机に向つて見ても、受験の準備は云うまでもなく、小説を読む気さえ起らなかつた。机の前には格子窓こうしまどがある、——その窓から外を見ると、向うの玩具問屋おもちゃどんやの前に、半天着はんてんぎの男が自転車のタイヤへ、ポンプの空気を押しこんでいた。何だかそれが洋一には、き気ぜわ忙しいせわような気がして不快だった。と云つてまた下へ下りて行くのも、やはり気が進まなかつた。彼はとうとう机の下の漢和辞書を枕にしなから、ごろりと畳に寝ころんでしまった。

すると彼の心には、この春以来顔を見ない、彼には父が違つて

いる、兄の事が浮んで来た。彼には父が違っている、——しかしそのために洋一は、一度でも兄に対する情が、世間普通の兄弟にじょう變つていると思つた事はなかつた。いや、母が兄をつれて再縁したと云う事さえ、彼が知るようになったのは、割合に新しい事だつた。ただ父が違つていると云えば、彼にはかなりはつきりと、こんな思い出が残つている。——

それはまだ兄や彼が、小学校にいる時分だつた。洋一はある日慎太郎と、トランプの勝敗から口論をした。その時分から冷静な兄は、彼がいくらいきり立つても、ほとんど語気さえも荒立てなかつた。が、時々さげす蔑むようにじろじろ彼の顔を見ながら、一々彼をきめつけて行つた。洋一はどうとうかつとなつて、そこにあつ

たトランプを掴つかむが早いか、いきなり兄の顔へ叩きつけた。トランプは兄の横顔に中あたつて、一面にあたりへ散乱した。——と思うと兄の手が、ぴしやりと彼の頬を撲ぶつた。

「生意なまいき気な事をするな。」

そう云う兄の声の下から、洋一は兄にかぶりついた。兄は彼に比べると、遙に体も大きかった。しかし彼は兄よりもがむしやらかな所に強味があつた。二人はしばらく獣けもののように、撲なぐつたり撲なぐられたりし合つていた。

その騒ぎを聞いた母は、慌ててその座敷へはいつて来た。

「何をするんです？ お前たちは。」

母の声を聞くか聞かない内に、洋一はもう泣き出していた。が、

兄は眼を伏せたまま、むつつり佇たたずんでいるだけだった。

「慎太郎。お前は兄さんじゃないか？ 弟を相手に喧嘩けんかなんぞして、何がお前は面白いんだえ？」

母にこう叱られると、兄はさすがに震え声だったが、それでも突かかるように返事をした。

「洋一が悪いんです。さきに僕の顔へトランプを叩きつけたんだもの。」

「嘘つき。兄さんがさきに撲ぶつたんだい。」

洋一は一生懸命に泣き声で兄に反対した。

「ずるをしたのも兄さんだ。」

「何。」

兄はまた擬勢ぎせいを見せて、一足彼の方へ進もうとした。

「それだから喧嘩になるんじゃないか？ 一体お前が年嵩としかさな癖に勘弁かんべんしてやらないのが悪いんです。」

母は洋一をかばいながら、小突くように兄を引き離した。すると兄の眼の色が、急に無気味ぶきみなほど険しくなった。

「好いやい。」

兄はそう云うより早く、氣違あやまいのように母を撲ぶとうとした。が、その手がまだ振り下されぬ内に、洋一よりも大声に泣き出してしまった。――

母がその時どんな顔をしていたか、それは洋一の記憶になかった。しかし兄の口惜くやしそうな眼つきは、今でもまざまざと見える

ような気がする。兄はただ母に叱られたのが、かんしゃく癩癩さわに障つただけかも知れない。もう一步臆測おくそくたくましを逞くするのは、善くない事だと云う心もちもある。が、兄が地方へ行つて以来、ふとあの眼つきを思い出すと、洋一は兄の見ている母が、どうも彼の見ている母とは、違っていそうに思われるのだった。しかもそう云う気がし出したのには、もう一つ別な記憶もある。――

三年前まえの九月、兄が地方の高等学校へ、明日立とうと云う前日あすだった。洋一は兄と買物をしに、わざわざ銀座ぎんざまで出かけて行つた。

「当分おおどけい大時計とも絶縁だな。」

兄は尾張町おわりちようの角へ出ると、半ば独り言のように云つた。

「だから——高いちこうへはいりや好いのに。」

「一高へなんぞちつともはいりたくはない。」

「負惜しみばかり云つていらあ。田舎いなかへ行けば不便だぜ。アイス

クリイムはなし、活動写真はなし、——」

洋一は顔を汗ばませながら、まだ冗談のような調子で話し続けた。

「それから誰か病気になつても、急には帰つて来られないし、——」

「そんな事は当り前だ。」

「じゃお母さんでも死んだら、どうする？」

歩道の端はしを歩いていた兄は、彼の言葉に答える前に、手を伸ば

して柳の葉をむしった。

「僕はお母さんが死んでも悲しくない。」

「嘘つき。」

洋一は少し昂奮こうふんして云った。

「悲しくなかつたら、どうかしていらあ。」

「嘘じゃない。」

兄の声には意外なくらい、感情の罩こもった調子があつた。

「お前はいつでも小説なんぞ読んでいるじゃないか？ それなら、僕のような人間のある事も、すぐに理解出来そうなもんだ。――

可笑おかしな奴だな。」

洋一は内心ぎよつとした。と同時にあの眼つきが、――母を撲ぶ

とうとした兄の眼つきが、はつきり記憶に浮ぶのを感じた。が、そつと兄の容子ようすを見ると、兄は遠くへ眼をやりながら、何事もないうように歩いていた。――

そんな事を考えると、兄がすぐに帰つて来るかどうか、いよいよ怪しい心もちがする。殊に試験でも始まつていれば、二日や三日遅れる事は、何とも思つていないかも知れない。遅れてもとにかく帰つて来れば好いが、――彼の考がそこまで来た時、誰かの梯子はしごを上つて来る音が、みしりみしり耳へはいり出した。洋一はすぐに飛び起きた。

すると梯子の上り口あがぐちには、もう眼の悪い浅川の叔母おばが、前屈まえかがみの上半身を現わしていた。

「おや、昼寝かえ。」

洋一はそう云う叔母の言葉に、かすかな皮肉を感じながら、自分の座蒲団ざぶとんを向うへ直した。が、叔母はそれは敷かず、机の側へ腰を据えると、さも大事件でも起つたように、小さな声で話し出した。

「私は少しお前に相談があるんだがね。」

洋一は胸がどきりとした。

「お母さんがどうかしたの？」

「いいえ、お母さんの事じゃないんだよ。実はあの看護婦だがね、ありやお前、仕方がないよ。——」

叔母はそれからねちねちと、こんな話をし始めた。——昨日あ

の看護婦は、戸沢とぎさわさんが診察に來た時、わざわざ医者茶の間へ呼んで、「先生、一体この患者かんじやはいつ頃まで持つ御見込みなんでしょう？ もし長く持つようでしたら、私はお暇を頂きたいんですが。」と云った。看護婦は勿論医者いしやのほかには、誰もいないつもりに違ちがいなかつた。が、生憎あいにく台所にいた松がみんなそれを聞いてしまった。そうしてぷりぷり怒おこりながら、浅川の叔母に話して聞かせた。のみならず叔母が氣をつけていると、その後ごも看護婦の所置ぶりには、不親切な所がいろいろある。現いまに今朝けさなども病人にはかまわず、一時間もお化粧けしょうにかかつていた。……：「いくら商売柄りようけんだつて、それじゃお前、あんまりじゃないか。だから私の量りようけん見けんじゃ、取り換えた方が好すいだらうと思うのさ。」

「ええ、そりやその方が好いでしよう。お父さんにそう云つて、

——

洋一はあんな看護婦なぞに、母の死期しごを数えられたと思うと、腹が立つて来るよりも、反かえつて気がふさいでならないのだった。

「それがさ。お父さんは今し方、工場こうばの方へ行つてしまつたんだよ。私がまたどうしたんだか、話し忘れてただいる内にさ。」

叔母はややもどかしそうに、爛ただれている眼を大きくした。

「私はどうせ取り換えるんなら、早い方が好いと思うんだがね、

——

「それじゃあ神山さんにそう云つて、今すぐに看護婦会へ電話をかけて貰いましょうよ。——お父さんにや歸つて来てから話しさ

えすれば好いんだから、——」

「そうだね。じゃそうして貰おうかね。」

洋一は叔母のさきに立って、勢い好く梯子を走り下りた。

「神山さん。ちよいと看護婦会へ電話をかけてくれ給え。」

彼の声を聞いた五六人の店員たちは、店先に散らばった商品の  
中から、驚いたような視線を洋一に集めた。と同時に神山は、派  
手なセルの前掛けに毛糸屑けいとくずをくつつけたまま、早速帳場机から  
飛び出して来た。

「看護婦会は何番でしたかな？」

「僕は君が知っていると思つた。」

梯子の下に立った洋一は、神山と一しよに電話帳を見ながら、

彼や叔母とは没交渉な、平日と変わらない店の空気に、軽い反感の  
 ようなものを感じない訳には行かなかつた。

## 三

午過ぎひるになつてから、洋一よういちが何気なく茶の間まへ来ると、そこ  
 には今し方帰つたらしい、夏羽織を着た父の賢造けんぞうが、長火鉢の  
 前に坐つていた。そうしてその前には姉のお絹きぬが、火鉢の縁ふちに肘ひじ  
 をやりながら、今日は湿布しつぷを巻いていない、綺麗な丸鬘まるまげの襟足  
 をこちらへまともあらわに露あしていた。

「そりやおれだつて忘れるもんかな。」

「じゃそうして頂戴よ。」

お絹は昨日きのうよりもまた一倍、血色の悪い顔を挙げて、ちよいと洋一の挨拶あいさつに答えた。それから多少彼を憚はばかるような、薄笑いを含んだ調子で、怯おず怯おず話の後あとを続けた。

「その方ほうがどうかなくなってくれなくっちゃ、何かに私だつて気がひけるわ。私があの時何した株なんぞも、みんな今度は下つてしまつたし、——」

「よし、よし、万事呑みこんだよ。」

父は浮かない顔をしながら、その癖じょうだん 冗談じょうだん のようにこんな事を云つた。姉は去年縁づく時、父に分けて貰う筈いまだ だった物が、未いまだ に一部は約束だけで、事実上お流れになつてゐるらしい。——そ

う云う消息しょうそくに通じている洋一は、わざと長火鉢には遠い所に、黙然もくねんと新聞をひろげたまま、さつき田村たむらに誘われた明治座の広告を眺めていた。

「それだからお父さんは嫌になつてしまふ。」

「お前よりおれの方が嫌になつてしまふ。お母さんはああやつて寝ているし、お前にや愚痴ぐちばかりこぼされるし、——」

洋一は父の言葉を聞くと、我知らず襖ふすま一つ向うの、病室の動靜に耳を澄ませた。そこではお律りつがいつもに似合わず、時々ながら苦しそうな唸りうな声を洩もらしているらしかった。

「お母さんも今日は楽じゃないな。」

独り言のような洋一の言葉は、一瞬間彼等親子の会話を途切とぎら

せるだけの力があつた。が、お絹はすぐに居ずまいを直すと、ちらりと賢造の顔を睨みながら、

「お母さんの病気だつてそうじゃないの？　いつか私がそう云つた時に、御医者様を取り換えていさえすりや、きつとこんな事になりやしないわ。それをお父さんがまた煮え切らないで、——」  
と、感傷的に父を責め始めた。

「だからさ、だから今日は谷村博士たにむらはかせに来て貰うと云つているんじゃないか？」

賢造はとうとう苦にがい顔をして、抛ほうり出すようにこう云つた。洋一も姉の剛ごう情じようなのが、さすがに少し面憎つらにくくもなつた。

「谷村さんは何時頃来てくれるんでしょう？」

「三時頃来るって云っていた。さつき工場こうばの方からも電話をかけて置いたんだが、——」

「もう三時過ぎ、——四時五分前だな。」

洋一は立て膝を抱だきながら、日曆ひじよみの上に懸っている、大きな柱時計へ眼を挙げた。

「もう一度電話でもかけさせましょうか？」

「さつきも叔母さんがかけたってそう云っていたがね。」

「さつきって？」

「戸沢とさわさんが帰るとすぐだとさ。」

彼等がそんな話を話している内に、お絹はまだ顔を曇まらせたまま、急に長火鉢の前から立上ると、さつきと次の間まへは行って行

った。

「やつと姉さんから御暇おいとまが出た。」

賢造は苦笑くしやうを洩らしながら、始めて腰の煙草たばこい入れを抜いた。

が、洋一はまた時計を見たぎり、何ともそれには答えなかつた。

病室からは相不あいかわらず変、お律の唸うなり声が聞えて来た。それが気の

せいかさつきよりは、だんだん高くなるようでもあつた。谷村博

士はどうしたのだろうか？ もつとも向うの身になつて見れば、母

一人が患者かんじゃではなし、今頃はまだ便べん々々と、回診かいしんか何かをし

ているかも知れない。いや、もう四時を打つ所だから、いくら遅

くなつたにしても、病院はどうに出ている筈だ。事によると今に

も店さきへ、——

「どうです？」

洋一は陰気な想像から、父の声と一しよに解放された。見ると襖ふすまの明いた所に、心配そうな浅川あさかわの叔母おばが、いつか顔だけ覗のぞかせていた。

「よっほど苦しいようですがね、——御医者様はまだ見えませんかしら。」

賢造は口を開く前に、まずそうに刻きざみの煙を吐いた。

「困ったな。——もう一度電話でもかけさせましょうか？」

「そうですね、一時しの凌しのぎさえつけて頂けりや、戸沢さんでも好いんですかね。」

「僕がかけて来ます。」

洋一はすぐに立ち上った。

「そうか。じや先生はもう御出かけになりましたでしょうかつてね。番号は小石川の×××番だから、——」

賢造の言葉が終らない内に、洋一はもう茶の間から、台所の板の間へ飛び出していた。台所には櫛がけの松が鯉節の鉦を鳴らしている。——その側を乱暴に通りぬけながら、いきなり店へ行こうとすると、出合い頭に向うからも、小走りに美津が走って来た。二人はまともにぶつかる所を、やっと両方へ身を躲した。

「御免下さいまし。」

結いたての髪を匀わせた美津は、極り悪そうにこう云ったまま、ばたばた茶の間の方へ駈けて行った。

洋一は妙にてれながら、電話の受話器を耳へ当てた。するとまだ交換手が出ない内に、帳場机にいた神山かみやまが、後うしろから彼へ声をかけた。

「洋一さん。谷村病院ですか？」

「ああ、谷村病院。」

彼は受話器を持ったなり、神山の方を振り返った。神山は彼の方を見ずに、金格子かねごうしで囲かこった本立てへ、大きな簿記帳を戻していた。

「じゃ今向うからかかって来ましたぜ。お美津さんが奥へそう云いに行つた筈です。」

「何てかかって来たの？」

「先生はただ今御出かけになつたつて云つてたようですが、——ただ今だね？　良さん。」

呼びかけられた店員の一人は、ちようど踏台の上ののりながら、高い棚たなに積んだ商品の箱を取り下そうとしている所だった。

「ただ今じゃありませんよ。もうそちらへいらつしやる時分だつて云つていましたよ。」

「そうか。そんなら美津のやつ、そう云えば好いのに。」

洋一は電話を切つてから、もう一度茶の間へ引き返そうとした。が、ふと店の時計を見ると、不審ふしんそうにそこへ立ち止つた。

「おや、この時計は二十分過ぎだ。」

「何、こりや十分ばかり進んでいますよ。まだ四時十分過ぎくら

いなもんでしよう。」

神山は体をねじりながら、帯の金時計を覗いて見た。

「そうです。ちょうど十分過ぎ。」

「じややつぱり奥の時計が遅れているんだ。それにしちや谷村さんは遅すぎるな。——」

洋一はちよいとためらった後、のち大股おおまたに店さきへ出かけて行く

と、もう薄日うすびもささなくなつた、もの静な往来を眺めまわした。

「来そうもないな。まさか家うちがわからないんでもなからうけれど、

——じや神山さん、僕はちよいとそこいらへ行って見て来らあ。」

彼は肩越しに神山へ、こう言葉をかけながら、店員の誰かが脱ぎ捨てた板草履いたぞうりの上へ飛び下りた。そうしてほとんど走るよう

に、市街自動車や電車が通る大通りの方へ歩いて行つた。

大通りは彼の店の前から、半町も行かない所にあつた。その角かどにある店蔵みせぐらが、半分は小さな郵便局に、半分は唐物屋とうぶつやになつてゐる。——その唐物屋の飾り窓には、麦藁帽むぎわらぼうや籐の杖とうが奇抜な組合せを見せた間に、もう派手はでな海水着が人間のように突立つていた。

洋一は唐物屋の前まで来ると、飾り窓くぼを後うしろに佇たみながら、大通りを通る人や車に、苛立いらだたしい視線を配り始めた。が、しばらくそうしていても、この問屋とんやばかり並んだ横町よこちようには、人力車じんりきしゃ一台曲らなかつた。たまに自動車が来たと思えば、それは空あきぐる車の札まを出した、泥にまみれているタクシイだつた。

その内に彼の店の方から、まだ十四五歳の店員が一人、自転車に乗って走って来た。それが洋一の姿を見ると、電柱に片手をかけながら、器用に彼の側へ自転車を止めた。そうしてペダルに足をかけたまま、

「今田村さんから電話がかかって来ました。」と云った。

「何か用だったかい？」

洋一はそう云う間でも、絶えず賑にぎやかな大通りへ眼をやる事を忘れなかった。

「用は別にないんだそうで、——」

「お前はそれを云いに来たの？」

「いいえ、私はこれから工場まで行って来るんです。——ああ、

それから旦那が洋一さんに用があるつて云つていましたぜ。」

「お父さんが？」

洋一はこう云いかけたが、ふと向うを眺めたと思うと、突然相手も忘れたように、飾り窓の前を飛び出した。人通りも疎な往来には、ちようど今一台の人力車が、大通りをこちらへ切れようとしている。——その楫棒かじぼうの先へ立つが早いか、彼は両手を挙げないばかりに、車上の青年へ声をかけた。

「兄さん！」

車夫は体を後に反らせて、際どく車の走りを止めた。車の上には慎太郎しんたろうが、高等学校の夏服に白い筋の制帽をかぶったまま、膝はざに挟んだトランクを骨太な両手に抑えていた。

「やあ。」

兄は眉まゆ一つ動かさずに、洋一の顔を見下した。

「お母さんはどうした？」

洋一は兄を見上ながら、  
体からだ中じゆうの血が生き生きと、急に両頬

へ上るのを感じた。

「この二三日悪くってね。——十二指腸の潰瘍かいようなんだそうだ。」

「そうか。そりや——」

慎太郎はやはり冷然と、それ以上何も云わなかった。が、その母譲りの眼の中には、洋一が予期していなかった、とは云え無意識に求めていたある表情ひらめが閃いていた。洋一は兄の表情に愉快な当惑を感じながら、口早に切れ切れな言葉を続けた。

「今日は一番苦しうだけけれど、——でも兄さんが帰つて来て好かつた。——まあ早く行くと好いや。」

車夫は慎太郎の合図あいずと一しよに、また勢いよく走り始めた。慎太郎はその時まざまざと、今朝上りの三等客車に腰を落着けた彼自身が、頭のどこかに映うつるような気がした。それは隣に腰をかけた、血色の好い田舎娘の肩を肩に感じながら、母の死目しにめに会うよりは、むしろ死んだ後に行つた方が、悲しみが少いかも知れないなどと思ひ耽ふけっている彼だった。しかも眼だけはその間も、レクラム版のゲエテの詩集へぼんやり落している彼だった。……

「兄さん。試験はまだ始らなかつた？」

慎太郎は体を斜ななめにして、驚いた視線を声の方へ投げた。すると

そこには洋一が、板草履を土に鳴らしながら、車とすれすれに走っていた。

「明日あすからだ。お前は、——あすこにお前は何をしていたんだ？」  
「今日は谷村博士が来るんでね、あんまり来ようが遅いから、立って待っていたんだけれど、——」

洋一はこう答えながら、かすかに息をはずませていた。慎太郎は弟をいたわ励りたかった。が、その心もちは口を出ると、いつか平凡な言葉に変わっていた。

「よっぽど待ったかい？」

「十分も待ったかしら？」

「誰かあすこに店の者がいたようじゃないか？——おい、そこだ

。
   
 車夫は五六歩行き過ぎてから、大廻しに楫かじ棒ぼうを店の前へ下おろした。さすがに慎太郎にもなつかしい、分厚な硝子戸ガラスドの立った店の前へ。

## 四

一時間の後店のちの二階には、谷村博士たにむらはかせを中心に、賢造けんぞう、慎しんた太郎ろう、お絹きぬの夫の三人が浮かない顔を揃そろえていた。彼等はお律りつの診察が終つてから、その診察の結果を聞くために、博士をこの二階に招じたのだつた。体格たくまの逞たくましい谷村博士は、すすめられた

茶を啜すすった後のち、しばらくは胴衣チヨツキの金鎖きんぐさりを太い指にからめていたが、やがて電燈に照らされた三人の顔を見廻すと、

「戸沢とざわさんとか云う、——かかりつけの医者は御呼び下すつたでしような。」と云つた。

「ただ今電話をかけさせました。——すぐに上あがるとおっしゃつたね。」

賢造は念を押すように、慎太郎の方を振り返つた。慎太郎はまだ制服を着たまま、博士と向い合つた父の隣りに、窮きゆうくつ屈くつそうな膝ひざを重ねていた。

「ええ、すぐに見えるそうです。」

「じゃその方かたが見えてからにしましょう。——どうもはつきりし

ない天気ですな。」

谷村博士はこう云いながら、マロツク革の巻煙草入れを出した。「当年は梅雨つゆが長いようです。」

「とかく雲行きが悪いんで弱りますな。天候も財界も昨今のようじゃ、——」

お絹の夫も横合いから、滑かな言葉をつけ加えた。ちようど見舞いに来合せていた、この若い呉服屋ごふくやの主人は、短い口髭くちひげに縁ふち無しの眼鏡めがねと云う、むしろ弁護士か会社員にふさわしい服装の持ち主だった。慎太郎はこう云う彼等の会話に、妙な齒痒はがゆさを感じながら、剛情に一人黙っていた。

しかし戸沢と云う出入りの医者まじが、彼等の間に交ったのは、そ

れから間もない後の事だった。黒紹くろろの羽織をひっかけた、多少は酒気もあるらしい彼は、谷村博士と慇懃いんぎんな初対面の挨拶をすませてから、すじかいに坐った賢造へ、

「もう御診断は御伺いになったんですか？」と、強い東北訛なまりの声をかけた。

「いや、あなたが御見えになってから、申し上げようと思つていたんですが、——」

谷村博士は指の間に短い巻煙草を挟んだまま、賢造の代りに返事をした。

「なおあなたの御話を承る必要もあるものですから、——」

戸沢は博士に問われる通り、ここ一週間ばかりのお律の容態ようだい

を可成かなり詳細に説明した。慎太郎には薄い博士の眉まゆが、戸沢の処しよほ方うを聞いた時、かすかに動いたのが気がかりだった。

しかしその話が一段落つくと、谷村博士は大様おおように、二三度独うなずり頷うなずいて見せた。

「いや、よくわかりました。無論十二指腸の潰瘍かいようです。が、ただいま拝見した所じや、腹膜炎を起していますな。何しろこう下した腹たはらが押し上げられるように痛いと言うんですから——」

「ははあ、下腹が押し上げられるように痛い？」

戸沢はセルの袴はかまの上に威いかつい肘ひじを張りながら、ちよいと首を傾けた。

しばらくは誰も息を呑んだように、口を開こうとするものがない。

かった。

「熱なぞはそれでも昨日きのうよりは、ずっと低いようですが、——」

その内にやつと賢造は、覚束ない反問の口を切った。しかし博士は巻煙草を捨てると、無造作むぞうさにその言葉を遮さへぎった。

「それがいかんですな。熱はずんずん下さがりながら、脈搏かえは反かえつてふえて来る。——と云うのがこの病の癖なんですから。」

「なるほど、そう云うものですか。こりや我々若いものも、伺つて置いて好いい事ですな。」

お絹の夫は腕組みをした手に、時々口髭くちひげをひっぱっていた。

慎太郎は義兄の言葉の中に、他人らしい無関心の冷たさを感じた。

「しかし私が診察した時にや、まだ別に腹膜炎などの兆ちようこう候も

見えないようでしたかな。——」

戸沢がこう云いかけると、谷村博士は職業的に、透かさず愛想あいその好い返事をした。

「そうでしょう。多分はあなたの御覧になった後あとで発したかと思うんです。第一まだ病状が、それほど昂進してもいないようですから、——しかしともかくも現在は、腹膜炎に違いありません。」

「じやすぐに入院でも、させて見ちやいかがでしょう？」

慎太郎は険けわしい顔をしたまま、始めて話まに口を挟んだ。博士はそれが意外だったように、ちらりと重まぶたそうな睡の下から、慎太郎の顔へ眼を注いだ。

「今はとても動かさないといいです。まず差当りさしあたは出来る限り、腹を温める一方ですな。それでも痛みが強いようなら、戸沢さんをお願いして、注射でもして頂くとか、——今夜はまだ中々痛むでしょう。どの病気でも楽じゃないが、この病気は殊に苦しいですから。」

谷村博士はそう云ったぎり、沈んだ眼を畳へやっていたが、ふと思ひ出したように、チヨツキ 胴衣の時計を出して見ると、

「じゃ私はもう御暇おいとまします。」と、すぐに背広の腰を擡もたげた。

慎太郎は父や義兄と一しよに、博士に来診らいしんの礼を述べた。が、その間あいだも失望の色が彼自身の顔には歴々と現れている事を意識していた。

「どうか博士もまた二三日中に、もう一度御診察を願いたいもので、——」

戸沢は挨拶をすませてから、こう云つてまた頭を下げた。

「ええ、上る事はいつでも上りますが、——」

これが博士の最後の言葉だった。慎太郎は誰よりずっと後に、暗い梯子を下りながら、しみじみ万事休すと云う心もちを抱かずにはいられなかった。……………

## 五

戸沢やお絹の夫が帰ってから、和服に着換えた慎太郎は、浅

さかわ 川の叔母や洋一と一しよに、茶の間の長火鉢を囲んでいた。  
 ふすま 襖の向うからは不相変、お律の唸り声が聞えて来た。彼等三人  
 は電燈の下に、はずまない会話を続けながら、ややもすると云い  
 合せたように、その声へ耳を傾けている彼等自身を見出すのだっ  
 た。

「いけないねえ。ああ始終苦しくつちや、——」

叔母は火箸を握ったまま、ぼんやりどこかへ眼を据えていた。

「戸沢さんは大丈夫だつて云つたの？」

洋一は叔母には答えずに、E・C・Cを啣くわえている兄の方へ言  
 葉をかけた。

「二三日は間違いあるまいつて云つた。」

「怪しいな。戸沢さんの云う事じゃ——」

今度は慎太郎が返事せずに、煙草たばこの灰を火鉢へ落していた。

「慎ちゃん。さつきお前が帰つて来た時、お母さんは何とか云つたかえ？」

「何とも云いませんでした。」

「でも笑つたね。」

洋一は横から覗のぞくように、静な兄の顔を眺めた。

「うん、——それよりもお母さんの側へ行くと、莫迦ばかに好にいい勻いがするじゃありませんか？」

叔母は答を促すように、微笑した眼を洋一へ向けた。

「ありやさつきお絹ちゃんが、持つて来た香こうすい水を撒まいたんだよ。」

洋ちゃん。何とか云つたね？ あの香水は。」

「何ですか、——多分床撒とこまき香水とか何んとか云うんでしよう。」

そこへお絹が襖の陰から、そつと病人のような顔を出した。

「お父さんはいなくつて？」

「店に御出でだよ。何か用かえ？」

「ええ、お母さんが、ちよいと、——」

洋一はお絹がそう云うと同時に、早速さつそく長火鉢の前から立ち上

つた。

「僕がそう云つて来る。」

彼が茶の間から出て行くと、米嚙こめかみに即効紙そつこうしを貼つたお絹は、

両袖に胸を抱だいたまま、忍び足にこちらへはいつて来た。そうし

て洋一の立った跡へ、薄ら寒そうにちゃんと坐った。

「どうだえ？」

「やっぱり葉が通らなくってね。——でも今度の看護婦になつてからは、年をとっているだけでも氣丈夫ですわ。」

「熱は？」

慎太郎は口を挟はさみながら、まずそうに煙草の煙を吐いた。

「今計はかつたら七度二分——」

お絹は襟あしに頤うすを埋めたなり、考え深そうに慎太郎を見た。

「戸沢さんがいた時より、また一分下いちぶつたんだわね。」

三人はしばらく黙っていた。するとそのひっそりした中に、板まの間を踏む音がしたと思うと、洋一をさきに賢造が、そわそわ店の

から帰つて来た。

「今お前の家うちから電話がかかったよ。のちほどどうかお上かみさんに御電話を願いますつて。」

賢造はお絹にそう云つたぎり、すぐに隣りへはいつて行つた。

「しようがないわね。家うちじゃ女中が二人いたつて、ちつとも役にや立たないんですよ。」

お絹はちよいと舌打ちをしながら、浅川の叔母と顔を見合せた。

「この節の女中はね。——私の所なんぞも女中はいるだけ、反かえつて世話が焼けるくらいなんだよ。」

二人がこんな話をしている間あいだに、慎太郎は金きんぐち口くわを啣くわえながら、寂しそうな洋一の相手をしていた。

「受験準備はしているかい？」

「している。——ことしだけど今年は投げているんだ。」

「また歌ばかり作っているんだろう。」

洋一はいやな顔をして、自分もまきたばこ巻煙草へ火を移した。

「僕は兄さんのように受験向きな人間じゃないんだからな。数学は大嫌いだし、——」

「嫌いだってやらなけりや、——」

慎太郎がこう云いかけると、いつかふすまぎわ襖際へ来た看護婦と、

小声に話していた叔母が、

「慎ちゃん。お母さんが呼んでいるとき。」と火鉢越しに彼へ声をかけた。

彼は吸いさしの煙草を捨てると、無言のまま立ち上った。そうして看護婦を押しよけるように、ずかずか隣の座敷へはいつて行った。

「こつちへ御出で。何かお母さんが用があるつて云うから。」

枕もとに独り坐っていた父は顛あじで彼に差さしず函をした。彼はその差函通り、すぐに母の鼻の先へ坐った。

「何か用？」

母は括くくり枕の上へ、櫛くしま巻きの頭を横よこにしていた。その顔が巾きれをかけた電燈の光に、さつきよりも一層やつ窶やつれて見えた。

「ああ、洋一がね、どうも勉強をしないようだからね、——お前からよくそう云つてね、——お前の云う事は聞く子だから、——

「ええ、よく云つて置きます。実は今もその話をしていたんです。」

慎太郎はいつもよりも大きい声で返事をした。

「そうかい。じゃ忘れないでね、——私も昨日あたりまでは、死ぬのかと思つていたけれど、——」

母は腹痛をこらえながら、齒齦はぐきの見える微笑をした。

「帝たいしやくさま 積ごふ 様なほの御符を頂いたせいか、今日は熱も下つたしね、この分で行けば癒りそうだから、——美津みつの叔父おじさんとか云う人も、やっぱり十二指腸の潰瘍かいようだつたけれど、半月ばかりで癒つたと云うしね、そう難病でもなさそうだからね。——」

慎太郎は今になってさえ、そんな事を頼みにしている母が、浅あましい気がしてならなかった。

「癒りますとも。大丈夫癒りますからね、よく薬を飲むですよ。」

母はかすかに頷うなずいた。

「じやただ今一つ召し上つて御覧なさいまし。」

枕もとに来ていた看護婦は器用にお律の唇くちびるへ水みず薬ぐすりの硝子ガラス管くだを当てがった。母は眼をつぶったなり、一ふたすい吸すいほど管くだの薬を

飲んだ。それが刹那の間ながら、慎太郎の心を明くした。

「好いい塩あんばい梅ばいですね。」

「今度はおさまったようでございます。」

看護婦と慎太郎とは、親しみのある視線を交換した。

「薬がおさまるようになれば、もうしめたものだ。だがちつとは長びくだろうし、床上げとこあの時は暑かろうな。こいつは一つ赤飯せきはの代りに、氷あずきでも配る事くばにするか。」

賢造の冗談さかをきっかけに、慎太郎は膝をついたまま、そつと母の側を引き下ろうとした。すると母は彼の顔へ、突然不審さかそうな眼をやりながら、

「演説えんぜつ? どこに今夜演説があるの?」と云った。

彼はさすがにぎよつとして、救いを請うように父の方を見た。

「演説なんぞありやしないよ。どこにもそんな物はないんだからね、今夜はゆっくり寝た方が好いよ。」

賢造はお律をなだめると同時に、ちらりと慎太郎の方へ眼くばせをした。慎太郎は早速膝を擡もたげて、明るい電燈に照らされた、隣の茶の間へ歸つて来た。

茶の間にはやはり姉や洋一が、叔母とひそひそ話していた。それが彼の姿を見ると、皆一度に顔を挙げながら、何か病室の消しょう息そくを尋ねるような表情をした。が、慎太郎は口を噤つぶんだなり、不相あいかわらず変冷やかな眼つきをして、もとの座蒲団ざぶとんの上にあぐらをかいた。

「何の用だつて？」

まっさきに沈黙を破つたのは、今も襟あごに顚あごを埋めた、顔かおいろ色の好くないお絹だった。

「何でもなかった。」

「じやきつとお母さんは、慎ちゃんの顔がただ見たかったのよ。」  
慎太郎は姉の言葉の中に、意地の悪い調子を感じた。が、ちよ  
いと苦笑したぎり、何ともそれには答えなかった。

「洋ちゃん。お前今夜よとぎ夜伽をおしかえ？」

しばらく無言が続いた後、浅川の叔母は欠伸あくびまじりに、こう洋  
一へ声をかけた。

「ええ、——姉さんも今夜はするって云うから、——」

「慎ちゃんは？」

お絹は薄いまぶた睨を挙げて、じろりと慎太郎の顔を眺めた。

「僕はどうでも好い。」

「あいかわらず不相変慎ちゃんには煮え切らないのね。高等学校へでもはいつたら、もつとはきはきするかと思つたけれど。——」

「この人はお前、疲れているじゃないか？」

叔母ば半ばたしなめるように、かんだか癩高いお絹の言葉を制した。

「今夜は一番さきへ寝かした方が好いやね。何も夜伽ぎをするからつて、今夜に限つた事じゃあるまいし、——」

「じゃ一番さきに寝るかな。」

慎太郎はまた弟のE・C・Cに火をつけた。すいし垂死の母を見て来た癖に、もう内心ははしゃいでいる彼自身の軽薄を憎みながら、

……

## 六

それでも店の二階の蒲団ふとんに、慎太郎しんたろうが体を横たえたのは、その夜の十二時近くだった。彼は叔母の言葉通り、實際旅疲れを感じていた。が、いよいよ電燈を消して見ると、何度か寝反りねがえを繰り返しても、容易に睡氣ねむけを催さなかつた。

彼の隣には父の賢造けんぞうが、静かな寢息ねいきを洩らしていた。父と一つ部屋に眠るのは、少くともこの三四年以来、今夜が彼には始めてだった。父は鼾いびきをかかなかつたかしら、——慎太郎は時々眼を明いては、父の寢姿ねすがたを透すかして見ながら、そんな事さえ不審に思いなぞした。

しかし彼の**まぶた**の裏には、やはりさまざまな母の記憶が、乱雑に漂つて来勝ちだった。その中には嬉しい記憶もあれば、むしろ忌わしい記憶もあった。が、どの記憶も今となつて見れば、同じように寂しかった。「みんなもう過ぎ去つた事だ。善くつても悪くつても仕方がない。」——慎太郎はそう思いながら、糊のりの匀いのする括くくり枕まくらに、ぼんやり五分刈ごぶがかりの頭あたまを落着けていた。

——まだ小学校にいた時分、父がある日慎太郎に、新しい帽子ぼうしを買つて来た事があつた。それは兼ね兼ね彼が欲しがつていた、**ひさし**の長い大黒帽だいこくぼうだった。するとそれを見た姉のお絹きぬが、来月らいげつは長唄ながうたのお浚さらいがあるから、今度は自分にも着物きものを一つ、拵こしらえてくれろと云い出した。父はにやにや笑つたぎり、全然その言葉に取

り合わなかつた。姉はすぐに怒り出した。そうして父に背を向けたまま、口惜しそうに毒口どくぐちを利きいた。

「たんと慎ちゃんばかり御可愛おかわいがりなさいよ。」

父は多少持て余しながらも、まだ薄笑いを止めやなかつた。

「着物と帽子とが一つになるものかな。」

「じゃお母さんはどうしたんです？ お母さんだつてこの間は、羽織を一つ拵たくわえたじゃありませんか？」

姉は父の方へ向き直ると、突然険しい目つきを見せた。

「あの時はお前も簪かんざしだの櫛くしだの買って貰もらったじゃないか？」

「ええ、買って貰もらいました。買って貰もらつちやいけないんですか？」

姉は頭へ手をやったと思うと、白い菊の花はな簪かんざしをいきなり畳

の上へ抛り出した。

「何だ、こんな簪ぐらい。」

父もさすがに苦い顔をした。

「莫迦<sup>ぼか</sup>な事をするな。」

「どうせ私は莫迦ですよ。慎ちゃんのような利口じやありません。私のお母さんは莫迦だったんですから、——」

慎太郎は蒼い顔<sup>あお</sup>をしたまま、このいさかいを眺めていた。が、姉がこう泣き声を張り上げると、彼は黙って畳の上の花簪を掴<sup>つか</sup>むが早いか、びりびりその花びらをむしり始めた。

「何をするのよ。慎ちゃん。」

姉はほとんど気違いのように、彼の手もとへむしやぶりついた。

「こんな簪なんぞ入らないって云つたじゃないか？ 入らなけりやどうしたってかまわないじゃないか？ 何だい、女の癖に、——喧嘩ならいつでも向つて来い。——」

いつか泣いていた慎太郎は、菊の花びらが皆なくなるまで、剛情に姉と一本の花簪を奪い合つた。しかし頭のどこかには、実母のない姉の心もちが不思議なくらい鮮あざやかに映かうつっているような気がしながら。——

慎太郎はふと耳を澄すませた。誰かが音のしないように、暗い梯子はしごを上あがつて来る。——と思うと美津みつが上り口から、そつとこちらへ

声をかけた。

「旦那様だんなさま」

眠っていると思つた賢造は、すぐに枕から頭を擡もたげた。

「何だい？」

「お上かみさんが何か御用でございます。」

美津の声は震えていた。

「よし、今行く。」

父が二階を下りて行つた後のち、慎太郎は大きな眼を明いたまま、家いえ中じゆうの物音にでも聞き入るように、じつと体を硬こわばらせていた。すると何故なぜかその間に、現在の気もちとは縁の遠い、こう云う平和な思い出が、はつきり頭へ浮んで来た。

——これもまだ小学校にいた時分、彼は一人母につれられて、谷中やなかの墓地へ墓参りに行つた。墓地の松や生垣いけがきの中には、辛夷こぶし

の花が白らんでいゝる、天氣の好い日曜の午過ぎだつた。母は小さな墓の前に来ると、これがお父さんの御墓だと教えた。が、彼のその前に立つて、ちよいと御時宜おじぎをただけだつた。

「それでもう好いの？」

母は水を手向けたむながら、彼の方へ微笑を送つた。

「うん。」

彼は顔を知らない父に、漠然とした親しみを感じていた。が、この憐あわれな石塔には、何の感情も起らないのだつた。

母はそれから墓の前に、しばらく手を合せていた。するとどこかその近所に、空氣銃を打つたらしい音が聞えた。慎太郎は母を後に残して、音のした方へ出かけて行つた。生垣いけがきを一つ大廻り

に廻ると、路幅の狭い往来へ出る、——そこに彼よりも大きな子供が弟らしい二人と一しよに、空気銃を片手に下げたなり、何の木か木の芽の煙った梢をこずえのこりお残惜しそうに見上げていた。——

その時また彼の耳には、誰かの梯子はしごを上つて来る音がみしりみしり聞え出した。急に不安になった彼は半ば床とこから身を起すと、「誰？」と上り口へ声をかけた。

「起きていたのか？」

声の持ち主は賢造だった。

「どうかしたんですか？」

「今お母さんが用だつて云うからね、ちよいと下へ行つて来たんだ。」

父は沈んだ声を出しながら、もとの蒲団ふとんの上へ横になった。

「用つて、悪いんじゃないんですか？」

「何、用つて云つた所が、ただ明日工場あしたこうばへ行くんなら、箆笥たんすの上

の抽斗ひきだしに単衣物ひとえものがあるつて云うだけなんだ。」

慎太郎は母を憐んだ。それは母と云うよりも母の中の妻を憐んだのだつた。

「しかしどうもむずかしいね。今なんでも行つて見ると、やつぱり随分苦しいらしいよ。おまけに頭も痛いとか云つてね、始終首を動かしているんだ。」

「戸沢さんにまた注射でもして貰つちやどうでしょう？」

「注射はそう度々は出来ないんだそうだから、——どうせいけな

けりやいけないまでも、苦しみだけはもう少し楽にしてやりたいと思うがね。」

賢造はじつと暗い中に、慎太郎の顔を眺めるらしかった。

「お前のお母さんなんぞは後ごしょう生も好い方だし、——どうしてあ  
あ苦しむかね。」

二人はしばらく黙っていた。

「みんなまだ起きていますか？」

慎太郎は父と向き合つたまま、黙っているのが苦しくなった。

「叔母さんは寝ている。が、寝られるかどうか、——」

父はこう云いかけると、急にまた枕から頭を擡もたげて、耳を澄ますようなけはいをさせた。

「お父さん。お母さんがちよいと、——」

今度は梯子はしごの中段から、お絹きぬが忍びやかに声をかけた。

「今行くよ。」

「僕も起きます。」

慎太郎は掻か巻まきを匆はねのけた。

「お前は起きなくつても好いよ。何かありやすぐに呼びに来るか  
ら。」

父はさっさとお絹の後から、もう一度梯子を下りて行った。

慎太郎は床とこの上に、しばらくあぐらをかいていたが、やがて立

ち上つて電燈をともした。それからまた坐つたまま、電燈の眩まぶし

い光の中に、茫ぼう然ぜんとあたりを眺め廻した。母が父を呼びによこ

すのは、用があるなしに関らず、実はただ父に床とこの側へ来ていて貰いたいせいかも知れない。——そんな事もふと思われるのだった。

すると字を書いた罫紙けいしが一枚、机の下に落ちているのが偶然彼の眼を捉えた。彼は何気なくなにげそれを取り上げた。

「M子に献けんず。……」

後あとは洋一の歌になっていた。

慎太郎はその罫紙けいしを抛ほうり出すと、両手を頭の後うしろに廻しながら、蒲団の上へ仰向けあおむになった。そうして一瞬間、眼の涼しい美津の顔をありあり思い浮べた。……………

## 七

慎太郎しんたろうがふと眼をさますと、もう窓の戸の隙間も薄白くなつた二階には、姉のお絹きぬと賢造けんぞうとが何か小声に話していた。彼はすぐに飛び起きた。

「よし、よし、じやお前は寝た方が好いよ。」

賢造はお絹にこう云つたなり、忙いそがしそうに梯子はしごを下りて行つた。窓の外では屋根瓦に、滝の落ちるような音がしていた。大降おおおりだな、——慎太郎はそう思いながら、早速さつそく寝間着を着換えにかかった。すると帯を解いていたお絹が、やや皮肉に彼へ声をかけた。

「慎ちゃん。お早う。」

「お早う、お母さんは？」

「昨夜はずっと苦しみ通し。——」

「寝られないの？」

「自分じゃよく寝たつて云うんだけど、何だか側で見えていたんじゃない、五分もほんとうに寝なかつたようだわ。そうしちや妙な事云つて、——私夜中に気味が悪くなつてしまつた。」

もう着換えのすんだ慎太郎は、梯子の上り口に佇んでいた。そこから見える台所のさきには、美津が裾を端折つたまま、雑巾か何かかけている。——それが彼等の話し声がすると、急に端折つていた裾を下した。彼は真鍮の手すりへ手をやったなり、

何だかそこへ下りて行くのが憚はばかられるような心もちがした。

「妙な事つてどんな事を？」

「半ダアス？ 半ダアスは六枚じゃないかなんて。」

「頭が少しどうかしているんだね。——今は？」

「今は戸沢とざわさんが来ているわ。」

「早いな。」

慎太郎は美津がいなくなつてから、ゆつくり梯子を下りて行つた。

五分のちの後、彼が病室へ来て見ると、戸沢はちようどジキタミンの注射をすませた所だつた。母は枕もとの看護婦に、後あとの手当をして貰いながら、昨夜ゆうべ父が云つた通り、絶えず白い括くくり枕の上に、

櫛くし巻まきの頭を動かしていた。

「慎太郎が来たよ。」

戸沢の側に坐っていた父は声こわだか高かに母へそう云つてから、彼にちよいと目くばせをした。

彼は父とは反対に、戸沢の向う側へ腰を下した。そこには洋ようい一ちが腕組みをしたまま、ぼんやり母の顔を見守っていた。

「手を握つておやり。」

慎太郎は父の云いつけ通り、両手の掌たなごころに母の手を抑えた。母の手は冷たい脂あぶら汗あせに、気味悪くじつとり沾しめっていた。

母は彼の顔を見ると、頷うなずくような眼を見せたが、すぐにその眼を戸沢へやつて、

「先生。もういけないでしょう。手がしびれて来たようですか。ら。」と云つた。

「いや、そんな事はありません。もう二三日の辛棒しんぼうです。」  
戸沢は手を洗っていた。

「じきに楽になりますよ。——おお、いろいろな物が並んでいますな。」

母の枕もとの盆の上には、大神宮や氏神うじがみの御札おふだが、柴しば又またの帝たい 釈しやくの御影みえいなど一しよに、並べ切れないほど並べてある。

——母は上眼うわめにその盆を見ながら、喘あえぐように切れ切れな返事をした。

「昨夜ゆうべ、あんまり、苦しかったものですから、——それでも今朝けさ

は、お肚なかの痛みだけは、ずっと楽になりました。——」

父は小声に看護婦へ云った。

「少し舌がつれるようですね。」

「口が御粘ねばりになるんでしょう。——これで水をさし上げて下さい。」

慎太郎は看護婦の手から、水に浸ひたした筆を受け取って、二三度母の口をしめした。母は筆に舌を搦からんで、乏しい水を吸うようにした。

「じやまた上りますからね、御心配な事はちつともありませんよ。」

戸沢かばんは鞆かばんの始末をすると、母の方へこう大声に云った。それか

ら看護婦を見返りながら、

「じや十時頃にも一度、残りを注射して上げて下さい。」と云つた。

看護婦は口の内で返事をしたぎり、何か不服そうな顔をしていった。

慎太郎と父とは病室の外へ、戸沢の帰るのを送つて行つた。次の間には今朝も叔母が一人気抜けがしたように坐っている、――戸沢はその前を通る時、叮嚀ていねいな叔母の挨拶むざうさに無造作な目礼を返しながら、後あとに従つた慎太郎へ、

「どうです？ 受験準備は。」と話しかけた。が、たちまち間違いに気がつくくと、不快なほど快活に笑いだした。

「こりやどうも、——弟さんだとばかり思ったもんですから、——」

慎太郎も苦笑した。

「この頃は弟さんに御眼にかかると、いつも試験の話ばかりです。やはり宅の忤せがれなんぞが受験準備をしているせいですな。——」

戸沢は台所を通り抜ける時も、やはりにやにや笑っていた。

医者が雨の中を帰った後のち、慎太郎は父を店に残して、急ぎ足に茶の間へ引き返した。茶の間には今度は叔母の側に、洋よういち一が巻煙草を啣くわえていた。

「眠いだらう？」

慎太郎はしやがむように、長火鉢の縁ふちへ膝ひざを当てた。

「姉さんはもう寝ているぜ。お前も今の内に二階へ行つて、早く一寝入りして来いよ。」

「うん、——昨夜<sup>ゆうべ</sup>夜つびで煙草ばかり呑んでいたもんだから、すっかり舌が荒れてしまった。」

洋一は陰気な顔をして、まだ長い吸いさしをやけに火鉢へ抛<sup>ほう</sup>りこんだ。

「でもお母さんが唸<sup>うな</sup>らなくなつたから好いや。」

「ちつとは楽になつたと見えるねえ。」

叔母は母の懐炉<sup>かいろ</sup>に入れる懐炉灰を焼きつけていた。

「四時までは苦しかつたようですがね。」

そこへ松が台所から、銀杏<sup>いちようがえ</sup>返しほつれた顔を出した。

「御隠居様。旦那様がちよいと御店へ、いらして下さいっておっしゃっています。」

「はい、はい、今行きます。」

叔母は懐炉を慎太郎へ渡した。

「じゃ慎ちゃん、お前お母さんを気をつけて上げておくれ。」

叔母がこう云って出て行くと、洋一も欠伸あくびを噛み殺しながら、

やつと重い腰もたを擡もたげた。

「僕も一寝入りして来るかな。」

慎太郎は一人になってから、懐炉を膝に載せたまま、じつと何かを考えようとした。が、何を考えるのだから、彼自身にもはつきりしなかった。ただ凄まじい雨の音が、見えない屋根の空を満し

ている、——それだけが頭に拡がっていた。

すると突然次の間から、慌しく看護婦が駆けこんで来た。

「どなたかいらしって下さいませよ。どなたか、——」

慎太郎は咄嗟とっさに身を起すと、もう次の瞬間には、隣の座敷へ飛びこんでいた。そうして遅たくましい両腕に、しつかりお律りつを抱き上げていた。

「お母さん。お母さん。」

母は彼に抱かれたまま、二三度体を震ふるわせた。それから青黒い液体を吐いた。

「お母さん。」

誰もまだそこへ来ない何秒かの間あいだ、慎太郎は大声に名を呼びな

がら、もう息の絶えた母の顔に、食い入るような眼を注いでいた。

（大正九年十月二十三日）



# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# お律と子等と

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>